

「ここに伸びゆく命あり」

県立神戸高等学校長
新谷 浩一

○ 兵庫県高校総体の季節になりました…

今よりもずっと若く、まだ学級担任を務めていた頃、私は体育の先生さんながらにジャージ姿で1日を過ごすほど、部活動指導を中心に据えた働き方をしていました。そのためか、この季節になるとやはり血が騒ぎます。

今シーズン最初に観戦できたのは男子バスケットボール部の試合でした。本校体育館で行われていたこともあり、コートに近い観覧席で見せていただきました。結果こそ東洋大姫路高校に惜敗しましたが、3年生にとっての最後の試合。試合終了まで諦めることなくボールを追いかける姿勢には強く胸を打たれましたね。



続いての観戦は馬事公苑で行われた馬術競技の県総体。本校は3人の女生徒が出場し、それぞれ1位、2位、3位の表彰状をいただきました。1日を通じて心に残ったシーンが2つあります。ひとつは競技を終えた直後に、生徒が感謝の思いを込めて馬を何度も撫でるシーン。これまで馬術競技を見たことがなかった私ですが、あのシーンには惹かれるものがありました。

もうひとつ印象に残ったのは大会委員長として場内を走り回る松井先生の姿です。多くの運動部の大会が顧問の先生方によって運営されているなか、貸与馬による障害飛越での競技となる馬術競技は乗馬倶楽部や馬術連盟の方々のサポートなしでは大会実施が困難です。気を遣うことも多いですね。事故なく大会が終わったときの松井先生の安堵した表情は、競技中の緊迫した顔とはうってかわったものでした。



ちなみに今大会で優勝した加納さんは小学4年生から競技を始め、馬術部に入りたい一心で神戸高校に入学したとのこと。「馬のことを第一に考えられる選手になる」との思いは、一連の仕草を見ているとよく伝わってきます。次の大会で個人としての全国大会の切符獲得が期待されるのはもちろん、今回2位、3位にとどまった辻岡さん、山崎さんとともに団体として切符を獲得することも期待されます。健闘をお祈りしたいですね。

また、先月末にはボート部の活躍も伝わってきました。高校総体のローイング競技大会です。男子舵手つきクォドルプルは岩井くん、山田くん、山口くん、林くん、小池田くんのメンバーで第2位入賞、女子ダブルスカルは東田さん、相坂さんのメンバーで第3位入賞です。両競技とも全国切符はこの大会で優勝したチームしか獲得できないため、それは残念ですが3年間の努力は実ったと言えるでしょう。おめでとうございます。

「新人戦はもっといい成果を残してくれますよ」と顧問の篠倉先生が教えてくれます。「でも、お伝えしたいのはそれだけじゃないんです」とのこと。この大会は雨の中の開催でした。一般的にボートの試合は相手との力関係に加え、雨や波、風といった自然環境への順応力も試されるそうです。それでもこの日、本校ボート部員は悪天候の中、集中力を切らすことなく全員で最後まで漕ぎきる『Row out』を成し遂げたそうです。

加えて、試合後にコースを片付ける場面では、本校ボート部員は雨に濡れながらも率先して取り組んでいたそうです。入賞したことはもちろんですが、そうしたシーンにも篠倉先生は感謝することしきりでした。3年生にとっては部活動の総決算となるこの時期、競技成績だけでなく、そんなふうにと人としての成長も見せられると嬉しいし、誇らしいですね。さあ、次に成長ぶりを見せてくれるのは誰でしょう。楽しみなところです。

○ さて…

そうした生徒の活躍を見る傍ら進めていた、先生方との面談が終わりました。様々なお話をお聴きする中、ご自身のお身体のことや子育て、介護に関する悩みもお聞きました。皆それぞれ事情を抱えながら働いておられます。私も9年ほど遠距離介護した両親を昨年、見送ったところ。伸びゆく命あれば歩みを止める命あり。先日、父の一周忌を終えました。父のことを書いた過去の通信を添えます。よかったらお読みください。

「父の日に思うこと」

高校教育課長
新谷 浩一

○ ささやかな彼の人生

昭和10年、彼は東京の下町で建具職人の長男として生まれました。戦争が始まり、やがて広島に疎開すると地元の子どものいじめの対象になります。時に肥えだめに嵌められました。バケツに貯めた小便を頭からかけられたこともあります。預かってくれた家庭でもその家の住人と同じ食事は与えられません。でも、不満や愚痴は口にできない日々でした。やがて東京に戻ることに、原爆が落ちる少し前に広島から離れました。

帰京しましたが戦後の家族揃っての生活は苦しく、昼食時は麦御飯に梅干しが1つの弁当をクラスのみんなから隠れて食べました。遠足などに行くお金が家になくとも解っていましたから、学校行事のお知らせは親に見せませんでした。そして当日は学校に行く振りをして家を出ると、1日中あてもなく町をふらつきました。

やがて父がアルコール中毒になります。夜まで帰宅しない日には母から「探しにいきなさい」と命じられます。それがたまらなく嫌でした。父はきまってドブの中に倒れ込んで寝ていましたから。びしょ濡れで異臭を放つ父に肩を貸して家まで帰る時、すれ違う人々の刺すような視線にたまらなく惨めな思いをしたものです。

学ぶことが好きで、大学にも行きたいと思いました。でも、働けなくなった父の分まで働く母にそんなことを言い出せるはずもなく、諦めました。商業高校を卒業し、薬品関係の会社で営業職として働き始めました。

やがて好きな人ができました。東京の実家で一緒に暮らすようになりました。子どもができました。(それが僕だ) でも、母との折り合いが悪く、妻は子どもを連れて家を出て行きました。彼はさんざん悩んだ末、母を捨て、実家から離れることにしました。親戚からも絶縁された彼は、横浜の社宅に親子3人で暮らし始めました。当たり前のことですが家財道具と呼べるようなものが殆どない部屋でそれは貧しい暮らしぶりでした。

彼はだから必死に働きました。そのためか彼は、気づけば社内でも稀な高卒学歴の部長となり、最期は関連会社の取締役まで任されました。あまりに奔放に育ったため将来を案じていた息子も何とか就職し、手を離れました。そして迎えた還暦。退職した翌月、ホテルの最上階で彼はビールを飲みながら息子に語りかけました。

「浩一。俺は、全部やり終えた気がするよ」彼はそう言いました。「もう、これからは自分のためだけに生きてもいいよな」息子は黙って頷きました。「農園を借りたんだ。そこで土と戯れながら、人間らしくゆっくり生きてみるよ」息子は関西で一緒に暮らすことを提案しましたが、彼は断りました。「いいよ。俺は老いぼれるまでは自分の足で立って生きるよ。そのかわり立てなくなったら頼むな。俺はおまえに世話してもらいたい」

それから30年弱、息子の助けを借りながらも自分の足で何とか生きてきた彼ですが、昨年12月、新型コロナウイルスに感染し、隔離入院となりました。そのひと月後には1歩たりとも歩けなくなり、そのまま介護施設に入らざるを得なくなりました。発症前日まで自転車を漕いでいた彼の日常生活は突如、奪われたのです。

でも、すべてを運命だと受け容れているかのように彼の表情は穏やかそのものです。それはもしかすると、隔離入院となる2週間前、身の回りの世話をするために訪れた息子に既にこう伝えていたからかもしれません。

「世間がおまえを優れた人間と見るか、ろくでもない人間と見るか、そんなことはどうでもいいんだよ。ただ、おまえは俺にとってはよく出来た息子で、そしておまえの中に流れているのは紛れもなく俺の血だ。だから、俺の人生はおまえを残せただけで十分満足なんだな」

彼はもう息子の名前さえ忘れてしまいました。でも、ささやかな彼の人生を息子が忘れることはないのでしょう。その生き様をさんざんに見せつけられているのですから。

家庭、学校、職場、仲間…。実に多くの方に学びながら、僕は日々を過ごしています。



「聴かせていただき、ありがとうございます」

県立加古川東高等学校長
新谷 浩一

○ 職員室の先生方の面談が終わりました。ありがとうございました。

60人の先生方からお話を聴かせていただきました。随分と学校から離れていた私にとっては「どんな思いをもって授業をしているか」「生徒にどのような期待をもって部活動指導をしているか」「生徒が安心できる居場所となるよう、担任として何を心がけているのか」という話はとても温かくて、心に染み入りました。やっぱり先生って素敵な仕事だな、改めてそう思った私です。

一方、うまく言葉をおかえしできなくなるお話もありました。その多くはご自身の心身の健康状態についてのお話と、ご家族の介護に関わるお話です。ともに自分の思い1つでどうにかなる話ではないですし、解決がなかなか見つけにくい話でもあります。そこで、今回は後者の方のお話を。

長年の介護が必要だったお母様をお見送りになられた先生からは「心配事が1つ減りました」というお話を聴かせていただきました。心の中の澱のように、家族が要介護状態となると24時間心配は絶えないですもんね。そのお声から、そのお顔から深い安堵感が伝わってきました。

もうひとつ。2年前にやはり要介護状態であったお母様をお見送りになられた先生からは「母は私に『生き方』に加えて、最後に『人の死にいき方』を教えてくださいました」というお話をお聴きしました。この話もう胸を打ちました。これまでそんなふうに思えたことが私には1度もなかったからです。

○ 私にとっての家族の介護。

私にとっての介護は8年半前に始まりました。それまでの私は盆暮れを含めて年に数回、埼玉県の実家に帰省していました。しかし、人事担当の筆頭をしていた平成27年、私は多忙を理由に半年ほど実家に寄りついていませんでした。そんな11月のある夜、母から泣き声の電話がありました。異変を感じた私はとりあえず夜行バスに乗り、一路関東へ。明るる朝、知らぬ間に荒れ果ててしまった実家を目にします。

母はすでに家事ができなくなっていました。風呂にも随分と入っていないようでした。父はそんな母を強く責めてばかりいました。私はとりあえず母を風呂に入れ、病院に連れて行きました。認知症でした。区役所等をまわり、要介護認定をしてもらい、デイサービスに支援してもらえよう環境を整えました。遠方に住む私には日常の世話ができないからです。

その当初は父も母の病状を理解し、献身的に母の日常を支えてくれました。しかし、老老介護というのは精神的にも肉体的にも実に厳しいものなのですね。月に2度ほど帰省する息子の助けを借りながらも、母が施設にお世話になることに反対し続けて世話をしていた父でしたが、1年ほどで音を上げました。

そこからは施設探しです。仕事柄、2日続けて不在にすることはできませんから、夜行バスを用いて月に何度も帰省しました。仕事を終えたら夜行バスに乗り込み、翌日は通院介助と施設見学に走り回り、再び夜行バスに乗る、そんなとんぼ返りの末、雰囲気の良いグループホームを見つけることができました。そして、そこで母はお世話になることになりました。

「これで母の日常は安心だな」そう思ったのも束の間、安堵感からか、それまで介護する側だった父が認知症になります。その状態での1人暮らしはとても心配だったのですが、アルコール類が好きでたまらない父にとって、施設入所は人生最大の楽しみを奪われることに他なりません。頑なに拒まれました。

そこで私の遠距離介護第2章が始まります。とりあえず自転車が漕げる父にとっては、ご飯を炊きさえすれば惣菜を買って来て食事はできます。洗濯機も回せます。それなりに生活はできていました。

それでも次第に自転車で迷子になったり、転んで救急車に運ばれたり、といったエピソードが生まれ始めます。休みがとれそうな日を見つけては仕事帰りに夜行バスに乗り込み、通院助や食材ストックづくりをし、日用品の買い出しなどをしたら夜行バスで戻ってくる、そんな日常が始まります。振り返るとトータル6年間、そんなことをしていました。

夜行バスの良い点は新幹線と比較して圧倒的に経済的であることに加え、1日休みを取りさえすれば、その1日は朝早くから夜遅くまで存分に使えるという利点もあります。また、その1日の終わりには私がつくった料理を肴に、2人でひたすら杯を傾けました。これは私にとってのご褒美でもありました。

毎回、夕方5時くらいに飲み始め、バス乗り場に移動しないといけな時間まで、ひたすら話を聴きました。お陰で私は父の生き方というか、生き様について随分と詳しくなりました。そのことを昨年の父の日に通信で書きました。今回、添えときますので、お時間があれば付き合っていただけると幸いです。

それなりに穏やかな日々。でも、転機は突然にやってきます。一昨年の末にコロナウイルスに感染し、10日間の隔離入院となったあと、父は自転車を漕ぐどころか歩くことさえできなくなってしまったのです。認知症も一気に進み、とてもじゃないけれど1人では暮らせないという診断を医師からもされました。施設入所を拒む気持ちさえ持てなくなるほど、歩行力と同様に認知能力も失われてしまったのです。

私の遠距離介護は第3章に入りました。月に1度帰省し、両親がお世話になっている施設を訪問する、それだけの日々です。身体は随分と楽になりましたが潤いはない日々です。5月13日には父が入院しました。軽い脱水状態とのことでしたが、17日には肺炎を発症。医師から「病状を説明したい」と電話がありました。幸い21日から23日までは埼玉への出張です。23日の午後に訪問しますと伝えました。

しかし21日、東に向かう新幹線の車中で突然に携帯電話が鳴ります。父が入院している病院から。「できれば今日、病状を説明したい」とのこと。私は病院に向かいました。そこで「現在はコロナ患者も入院しているため、すべての患者の面会を禁止していること」、とは言え、「遠方から来てもらったので僅かな時間であれば特別に面会を許可すること」、そして、「父の先は長くないこと」を告げられます。

その後、病床の父と対面させてもらいました。父は酸素マスクをつけていました。「来たよ。わかる？」と話しかけると父は2回頷きます。手を握ると父は私の手を強く握り返しますが、呼吸が荒く、あまりにつらそうでした。遠距離介護をしてきた日々が頭の中を巡ります。涙が止まらなくなりました。

翌日、遺体安置所で私は父と2人きりになりました。「なかなか自転車が漕げるようにならない僕を、何度も小学校の校庭で練習させてくれて有り難う」そう言いました。「運動会でしか活躍できない僕のために、いつも応援席の一番前に陣取って大声で応援してくれて有り難う」そう言いました。

「中学校の時ほとんど家に帰らないで遊び歩いていた僕を、見捨てないでいてくれて有り難う」そう言いました。「教員採用試験の前日に不安で喋れなくなった僕に『おまえ1人くらい食わせてやるから、何回落ちたっていいぞ』そう笑ってくれて有り難う」そう言いました。

私の親族は皆、東京在住なのですが「浩ちゃんが来るのを待っていたんだな」口々にそう言ってくれています。偶然とは言え、本当に有り難い出張でした。

五ノ井先生。心配事が1つ減りました。でも、つらいですね。

下村先生。『生き方』だけでなく、『死にいき方』も学ぶことができました。でも、せつないですね。

遺体安置所からの帰り道の空には朧月。ふとシャツの袖を見るとカフスボタンが片方なくなっていました。前々からお気に入りの銀色のカフス。

「持って行くつもりなんだね、親父」月に向かって、私はそう呟いてみました。この通信を皆さんが読んでくださる日、いよいよ父の告別式です。

